

京都大学 京都市との連携事例

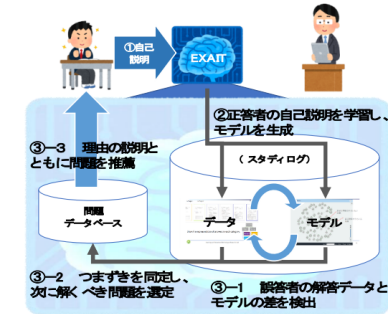
自治体の課題(ニーズ)



京都市では、児童・生徒一人一台の端末整備が加速しており、テスト等をコンピュータで実施するCBT(Computer Based Testing)も行われるなど、データを蓄積できる環境も整っていることに加えて、大学においても、そのデータを活かすために教育現場におけるAI活用の研究も進展している。

一方で、学校教育現場では、AIが解析したデータに児童・生徒(学習者)が納得できなければ、主体的な学習への意欲が引き出せないという課題が存在。

研究成果(シーズ)の還元



AIが解析したデータとして、単に問題が自動的に提示されるだけではなく、学習者がより納得して課題に取り組めたり、先生が児童生徒のつまづきを把握して適切な指導を行えるよう、より学習・指導に有効な分析データを導き出す「説明できるAI」の開発を行うほか、実証研究を実施している。

京都市と連携(実証校でのシステム導入)を行い、AIシステムの開発・実証を通じて、教育現場で本当に活用されるための教育AI技術の確立を目指していく。

この連携に携わった研究者



学術情報メディアセンター
緒方 広明 教授

(研究者の経歴)

1998年5月博士(工学)、徳島大学。2017年4月より現職。

人々の学びを支援する情報技術の開発を中心に、モバイル・ユビキタスラーニング(Computer Supported Mobile and Ubiquitous Learning)、協調学習環境、CSCL(Computer Supported Collaborative Learning)、ラーニングアナリティクス、教育ビッグデータ、教育データサイエンス、教育情報学、教育工学等の研究に従事。